



Title	大阪大学総合図書館蔵 奈良絵本『岩屋』
Author(s)	柴田, 芳成
Citation	日本語・日本文化. 2025, 52, p. 110-85
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100663">https://doi.org/10.18910/100663</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【資料紹介】

## 大阪大学総合図書館蔵 奈良絵本 『岩屋』

柴田芳成

【略解題】 上中下の三冊。いずれも16 cm×24 cm。表紙は金泥草木絵紺色表紙で、中央に朱色題簽を貼り「岩屋上（中・下）」と記す。見返しは銀箔散らし。本文料紙は楮紙。袋として、上冊は19丁、中冊は26丁、下冊は22丁。挿絵は上冊7図、中冊5図、下冊6図。資料番号04205581400、04205581509、04205581608。

物語は、継子物の内容を備えた公家物である。清和天皇の御代、三条堀川の中納言は白川の姫と結婚し、姫君をもうける。姫君は八歳で母を亡くし、継母を迎える。右大臣の子四位少将が姫君に通うこととなる。姫君十三歳の時、筑紫の帥となった父に同行して太宰府へ下向するが、明石で継母は佐藤左衛門に姫君殺害を命じる。佐藤は実行するに忍びず、海中の岩に姫君を置き去りにす

る。姫君の失踪を知った四位少将は書写山で出家する。（上冊）父一行は姫君を悲しみつつ、筑紫へ向かう。五日後、姫君は海士に発見され、岩屋に保護される。三年後、父は都に帰り、大納言に任じられる。関白の子二位中将が落馬の療治のために下っていた伊予から都への帰途、岩屋の姫君を見つけ、都へ連れ帰る。事情を察した中将の北の方は里に帰ろうとする。中将の母北政所は姫君をこころよく思わず、四人の娘とともに嫁比べをして物笑いにしようとする。（中冊）しかし、姫君の姿形、教養、楽器の才に圧倒され、結婚を許す。その後、中将と姫君の間には若君、姫君が生まれた。袴着の儀式に呼ばれた公卿、殿上人の中に姫君の父大納言もあり、これまでの経緯が明らかとなる。大納言に離縁された継母は

姫君を呪詛しようとするが、自分が物狂いとなつて死ぬ。海士夫婦は位階、領地などを賜るが、佐藤左衛門は褒賞を辞退し、高野山で修行する。以後、中将夫婦、子どもたちも繁盛した。(下冊)

「岩屋(岩屋の草子、たいのやひめ)」は伝本も多く、本文もすでに何種類も紹介されている。物語の内容に示した通り、本書の姫君に対する男主人公は、前半では四位の少将(姫が行方不明となつたことにより出家)、後半では二位の中将となつており、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」に従えば、A系統にあたり、その本文は第七種に属すと思われる。同目録には「天理・奈良絵本 横三冊」が例として掲出されるが、このほかに、大阪大谷大学蔵本も本系統にあたると思ひい。大阪大谷大学本と本書とは、本文の一致度が高く、挿絵の図柄、および挿入場所も極めて近い。この第七種本は、成立時期が早いとみなされるわけでもなく、松本氏の論考中でも本文比較のために部分的に引用されるにすぎず、これまでに全体が紹介されたこともない。しかし、版本系統の本文をもつ諸本グループとしては、同形式の横型奈良絵本である大阪大谷大学本の存在もあり、

ある程度の生産数のもとで流布した本文であろうと考えられるため、ここに紹介する次第である。

(参考文献)

- ・『室町時代物語集』第三(井上書房、1962年)
- ・松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語(続)」:『伏屋「岩屋」「一本菊」外』(『斯道文庫論集』五(1966年))
- ・同「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」『御伽草子の世界』三省堂、1982年)
- ・金光桂子「いはやものがたり」解題(新天理図書館善本叢書『奈良絵本集』五、八木書店、2019年)
- ・大阪大谷大学蔵本は、国文学研究資料館の国書データベースでデジタル画像が公開されている。

※本書の閲覧・撮影・掲載にあたり、大阪大学総合図書館にご高配を賜りました。記して感謝申し上げます。

【本文】(翻刻にあたって、漢字は通行の字体とし、私に読点を付した)

清和天皇の御時、三条はり川に中納言ありすゑのきやうと申人をはしける、家とみさかへ給ひ、何事に付てもと

ほしき事なければ、よろつ御心にまかせ給ひけり、あふ  
 たの御かとのみや白川のひめ君と申に御心をよせ、おり  
 くうかゝひ給へとも、なひくけしきもおはしまさてあ  
 かしくらし給ふ所に、御心さしのかくもふかゝりしか  
 は、しほやくうらの夕けふり、そ」（1才）よふく風に  
 うちなひき給ふ、たひかさなりぬれば、人しりて雲のう  
 へ人までももてなしかしつき奉る、ふうふの中のならひ  
 にて、程なく宮御くわいにんまし／＼ければ、わか御所  
 へうつし参らせて、ほり川のみやとそ申ける、月日かさ  
 なるまゝに、御さんのひもたいらかなり、あたりもかゝ  
 やく程のひめ君にてそおはします、中納言有かたき事  
 におほしめし、いつきかしつき給ふ事かきりなし」（1  
 ウ）絵1」（2才）此姫君八の御年、三月十五日のあか  
 つきより、はゝみや風の御心ちとて、やまふのゆかにふ  
 させ給ふ、したいにおもらせ給て、おなしき十九日のあ  
 かつき、つるにはかなく成給ふ、御年二十八、おしかる  
 へき御よはひかな、しやうしむしやうのおきてとは申な  
 から、中納言の御心の内、をしはかられてあはれなり、  
 御跡のいとまなみさま／＼にとりおこなひたまふ、御か  
 たみには、ひめ君を御」（2ウ）らんして、御袖をしほ

り給ふ、御ゆかりの人／＼、さて有へき御事ならねはと  
 すゝめ給て、きたのかたをそむかへさせ給ふ、此ひめ君  
 に一あねなる御むすめをもち給へり、わかひめ君、人の  
 ひめ君もへたてなくおろかにおもふましきとてむかへ給  
 ひけり、扱こそ北の御かたもめやすくもてなし給へは、  
 中納言よにうれしくそおほしめしける、北のかたいらせ  
 給ふ日より、にしのたいをしつ」（3才）らひて、みや  
 はらのひめ君をそおき参らせ給ふゆへに、たいのひめ君  
 とそ申ける、明暮ははゝみやの御事のみおほしめし、わ  
 すれたまはて御本そのの御前にてねんふつ申給ふ、中納  
 言はかくていつとなくおはし侍りける事をかなしみ給け  
 り、扱程ちかくおはしける右大臣殿の御子に四ゐの少将  
 と申人、かのひめ君の御事をほのきゝ給ひて、めのとを  
 かたらひて、中納言殿にしか」（3ウ）しか申されけれ  
 は、りやうしやうをそし給ける、其程にたいの君十三の  
 御年、つくしのそつに成給ふ、大きいふのたいにうけ  
 られけるうへは、大きいふへくたり給ふ、北の御方お  
 やこ、たいのひめ君をもくし給ふへきよしきこえけれ  
 は、四ゐの少将、めのとにの給ひけるは、ちんせいまで  
 の道、なみのうへおほつかなく侍れば、たいの君をはみ



やこにとゝめ給へかし、とても御やくそくの事なれはと申「(4才)されければ、中納言おほせけるは、たさいふへくたすへきにはあらねとも、たいの君はゝにわかれて、いつとなく露おもけなる有さま、いつかはおもひをはらすへき、しのひかねたる袖のうへ、ほしあへぬさまの心を、いつなくさむへしとおほえねは、ひきくして、うらくをしまゝときに見せ奉り、されは、北のかたおやこをも、たいの君の御ときくし奉る事なれば、かなふましきよしの」(4ウ) 給へは、少将ちからおおはす、扱都を立てよとへつき給ふ、少将もよとまてくたり給ひて、やうく申されけれども、かなはずして、すてにともつなときて御舟いたしければ、少将は見をくり給ひて、なくくみやこへかへり給ふ」(5才) 絵2「(5ウ) 扱そつ殿くたり給ふほとに、ゑくち、かさきのゆうくんともおほえとのへそ参ける、そつ殿おほせけるは、われよりもたいの君の舟をもてなし給へと有しかは、ゆうくんとも参て、いまやうなとおもしろくうたひすましければ、たいの君の御舟より、れうら金きんかすかすそたひにける、にしの宮なんくうのおきをこきすきて、つくしへとをり給ふ、そつ殿ははりまのこくし

にておはし」(6才) ければ、もくたいはあかしにて御まうけをかまへけり、七日の御とうりう有けり、比は三月十二日、なにおふあかしの月なれば、色ある袖にややとりける、ひかるけんしの大しやうの、すまよりあかしのうらつたひ、よせくるなみの露ことに、くたけて月そやとりける、松ふく風、なみのをと、みきはのちとり声すこく、あまのつり舟かすかにて、かのゆきひらの中納言、もしほたれつゝ」(6ウ) となかめしも、いまにしられてあはれなり、あまのたくもの夕けふり、さなからかすみにまかひつゝ、うすゝみのゑににたり、しよしやの山、ひろさはよりもきよけなる、ゆうくんとも参けるを、たいの君の御舟をもてなせと有ければ、かの御舟にのりうつり、くわんさつの袖をひるかへして、さまくきよくをもよほしけり」(7才) 絵3「(7ウ) 扱七日にも成ければ、御出とすすむれば、其時、北のかた、さとうさへもんさたいゑをめしての給ふやう、わか心にうらみあり、此事かなゆる物ならは、いひきこえんと有ければ、さたいゑ、かりきぬのそてをかきあはせ申やう、せんきまんきのかたきの中、大はんしやくをくたきて入道なりとも、いかてかおほせをそむき申へきといひけれ

は、北の方、此よしきこしめし、打ゑませ給ひ」（8才）  
 て、此事ゆめ／＼人にしらすな、心のうちのうらみとい  
 ふこと、われも人もひとりつゝもちたるひめそかし、わ  
 かひめ君をはそむけつゝ、たいの君をのみもてなし給ふ  
 こそ、世にほいなくおほゆれ、すゑの世までもおもひや  
 らるれ、いかにもしてたいの君をぬすみいたして、うみ  
 へしつめよ、よろこひには三こくをなんちか心にまかす  
 へしとの給へは、さたいゑ、やすき」（8ウ）ほと御  
 事と申、さらは夕さりぬすみいたし参らせんと申しため  
 けり」（9才）絵4」（9ウ）北のかた、うれしけに打ゑ  
 みてかへり給ぬ、扱はりまのかみ、けつかうに御ゆとの  
 をこしらへて、たいの君を入奉る、其時、まゝはゝ、よ  
 き事とおもひ、われも御ゆとのへ参らんと有ければ、た  
 いの君の御ときにいらせ給へとそ有ける、色々のさか  
 な、へいし一具もたせて御ゆへ入て、めのと、かいしや  
 く、そのほかの女はうたちにいるるまで、よく／＼さけ  
 をしい給ひしかは、北の御方かやうによくもてな」（10  
 才）し給ふと、けうに入て、せんこもしらすゑいにけ  
 り、さてたいの君、御ゆにおりさせ給ひてあからんとし  
 給へは、まゝはゝ、いまちとゝの給ひて、ひかへ／＼よ

く／＼くたひらかし参らせて、御ゆよりあけ参らせ給ひ  
 けり、扱あかつきに、はや御出と有ければ、をの／＼御  
 舟にめしぬ、さるほとに、さとうさへもん、夜ふけて小  
 舟にのりうつりて、人みなしつまりて、たいの君の御  
 舟にのりうつり、わか舟をはせかいに」（10ウ）つなき  
 て、御舟にのりてやかたの内を見れば、はゝみやの御め  
 い日にて有ければ、らいかうのあみたのゑさう一ふくか  
 け奉りて、せうかうし給ひて、ひめ君はほんその御前  
 にそまします、うらやまふきの十三に、もよきのうち  
 き、こきくれないあはかまをき、御手にはみなすいしや  
 うのしゆすをもちながら、御ゆにくたひれさせ給ひて  
 つくゑによりかゝり、せんこもしらすやとりたまひけ  
 り」（11才）絵5」（11ウ）さとうさゑもん、とし火を  
 うちけして、やはらさしよりて、なつかしけにかきいた  
 き奉り、扱おのれか舟にのりうつり、はるかのおきへそ  
 こきいたす、さとうさへもん、おもひけるは、かくのこ  
 とくぬすみ出し奉りぬ、おとろかし申てりんしゆうをそ  
 すすめ申さんとおもひける、十八日の月くまもなかりけ  
 るに、御すかたを見奉れば、よそなからきゝおよひ申せ  
 しよりも、あないつくしの御すかたやとお」（12才）も

ふに、御いたはしきかきりなくして、うみへも入奉らすして、わか身をくはんしおもひける、われおとこの身ならすは、かゝるうきめをはよも見しと、あさましくおほえて、たへこかれかなしみけり、いかさまにも、おとろかし奉りてりんしうをすゝめ申さんとおもひて、やうくにおとろかし申せは、ひめ君うちおとろきて、あたりを見給へは、めしつる御舟にはあらずして、あやしき小舟にのり給」(12ウ) ひ、御そはにおとこ一人なきあり、こはいかにゆめかうつゝかとおほへす、扱おとこ申やう、われはこれ、まゝはゝの御方にさとうさへもんと申もの也、何の御とかはしりまいらせねとも、うみへしつめ奉れとおほせをかうふりて候程に、これまで御とも申て候、いまは御りんしうにむかはせ給へは、御さいこの御ねんふつや候へきと申ければ、ひめ君、此よしきこしめし、これは何ゆへの事そや、夢かや、さらにうつゝとも」(13オ) おほへすとて、ふなそこのうちふし給ふ、わかせしとかは何ことそ、をかけるつみもおほえすとて、もたへこかれ給へとも、そのかひさらになかりけり、しはらく有て、ひめ君、御なみたをおさへての給ひけるは、扱もなむち、われをやかてもうしなはて、り

んしうをもすゝめつるこそ返々もうれしけれ、おなしくは、いましはらく、われにいとまをゑさせよ、われはゝみやにおくれ奉りしより、まい日おこ」(13ウ) たらす、くわんをんきやうを三十三くわんよみ奉るか、けふはゆにくたひれて、いまたよます、御きやうよみおはらは、うみにしつめよとおほせ有て、御きやうをそあそはしける、扱三十三くわんよみおはらせ給ひて、御ゑかうの御ことはそたつとき、十一くはんの御きやうは、此世におはしますちゝ御せん、けんせあんおんこしやうせんしよとのため、十一くはんの御きやうは、らいせにましますはゝみや」(14オ) の御ため、たとへならくのそこにしつみ給ふとも、此御きやうのくりきによりて、ちゝはゝわれく一はちすの身となし給へ、いま十一くはんの御きやうは十あく五きやくのものをもしやうほんれんたいにやとし給へ、一ふつしやうとへむかへとり給へとふしおかみて、さとうさへもんにの給ふやう、わか心におもひのこす事有、いま一度ちゝを見参らせはやおもふ也、又むまれおちしより十三にな」(14ウ) るまていたきそたてたりしめのとを見たくおもへとも、みんといふともよも見せし、みへんといふともかいあらし、

よくく物をあんするに、とかくおもふもつみふかし、  
 とくくうみへしつめよと、かきくとき給ひて、ついた  
 ちあかり、はかまのそはたかくあけ、しやうそくのおひ  
 つよくしめ、きぬのそてをちかへてくひにかけ、ふなは  
 たにたちあかり、さいこの十ねんとなへつゝ、いまや  
 くくと待給ふ、(15才) 絵 6 (15ウ) さいいゑ、此御  
 有さまをみて、上らうの御心ほとかめしき物はなし、  
 下らうならはかなはぬまでもたすけよとこそ有へきに、  
 おほしめしきりたる御心の内のいとをしさよ、われはは  
 らくく六人、子をもちたり、かれらを見る時はいつれ  
 を見れともあかすおもふに、まして、御ちゝそつ殿、此  
 ひめ君一人もち給ひて、玉のことくにおもひてこれまて  
 くそくし参らせ給ふに、かきけすやうにうしなひたま  
 はゝ、さ(16才)こそなけきたまはんと、かねておも  
 ふそかなしき、させるおやこのかたきにてもおはしまさ  
 ぬに、花のやうとなるひめ君を、さうなぐうみへ入奉  
 らん事のかなしきよとて、おつるなみたはせきあへす、  
 ひめ君はいまやくとそ待たまふ、月のひかりに御きや  
 うをうちあけくよませ給ふ、なにしおふあかしのうら  
 の月なれとも、こよひはなみたにかきくもり、こしちへ

帰るかりかねに、あはれふみをもことつてまほし(16  
 ウ)くそおほしめしける、松ふく風のをと、いそうつな  
 み、さよちとりと声をくらへてなきこかれゆく程に、あ  
 はちのゑしまのいそへそゆられける、其時さいいゑ、う  
 みの中をみれば、大なるいわほあり、うれしくおもひ  
 て、ひめ君に申やう、御なこりおしくは候へとも、此岩  
 のうへにてともかくも身つからなせ給へとて、かきい  
 たき奉り、なさけなくすておきて、さいいゑは舟にのり  
 てこきかへりけり、ひ(17才)ひめ君は岩の上にすて  
 られて、天にあふきちにふし、たへこかれたまひける、  
 はるかななみちをへたてゝも、なきかなしみ給ふ御声  
 は、かすかにきこえけり、さいいゑか心のうちもたとへ  
 んかたもなかりけり(17ウ) 絵 7 (18才) なくくさ  
 しかへる舟のかいのしつくも、おつるなみたもあらそひ  
 て、袖はしとゝにぬれにけり、さるほとに、あかしには  
 ひめ君のうみへ入たまひぬとて、あはてさはきければ、  
 そつ殿、いそきひめ君の御舟にのりうつりて、やかたの  
 内を御らんすれば、ふすまのともあたゝかに、たゝい  
 ままてはおはしけるとおほえたり、御めのと、そのほか  
 の女はうたち、手ことに火をともしておめきさけふこ

ゑく、たと」(18ウ) へんかたもなかりけり、つみに見えさせ給はねは、はりまのかみ、やかて百よちやうのあみをおろして、そのあたりをひかせらるれとも、御しかいはなかりけり、そつ殿、あまりのかなしさにおほしめしけるは、四みの少将よとまてしたひきたり、さまくくとめまほしく申されつるか、もし此人ぬすみても有るやらんとて、いそきみやこへ人をものほせ給へは、きゝ給ひて、おとろきさはき、ほいなき」(19オ) 事におほしめし、みとりのたふさをきり給ひて、御年二十五にて出家し給ふ、いまたあひ見ぬ北の御かたゆへに、花のたもとをこきすみそめに御身をやつし、はりまのしよしやへそくたり給ふ、ためしすくなき事にぞ申ける」(19ウ) 上冊終わり

さるほとに、あかしにはひめ君の御めのと、そのほかの女はうたち、あまたもとりをきりたまふ、そつ殿も御くしおろしたくはおほしけれとも、君に御いとま申さずしてはいかゝ有へし、そのうへうさのみやのちよくしをたまはり、かたくわたくしにはからひかたしとて、すみそめの御けさはたにかけさせ給ひて、ひとへにほたいにおもむき給ふか、さて有へきにあらされは、な」

(1オ) なくなつくしへくたり給ふ、扱ひめ君は岩の上に五日までそおはしける、一日もいきておはしますへきにあらされとも、こくうに声ありて、われたちそひてまほるなりとの給ふ、五日の程はたゞゆめのことにそありける、中くかくて物をおもふもつみふかし、みちくるしほにひかれて、うみへ入なんとおほしければ、はゝみやの御声にて、いのちをうしないたまふへからず、いましはしまち」(1ウ) 給へ、よるひる、われたちそひてまもるなりとありければ、さてはらいせにおはしますはゝ御せんにてわたらせ」(2オ) 給ふかや、いかにしか、いのちなからへきやらん、とくとくはゝのおはします所へむかへとり給へと、とかくなみたはせきあへす」(2ウ) さるほとに、あま人はしほのひるまをうかゝひて、あさりしにこそ出にけるか、岩の上を見ければ、ゑにかける女はうのふせいしたる人のおはしければ、あまこれを見て、こはいかに、たゝ人にてはあらし、てんにんのやうかうか、やはりうによのあそひたまふか、かゝる人をはいまたみすとおもひ、ふねさしよせてつくくとまほりける、ひめ君、かゝる物は見なれたまはねは、おそろしや、人にてはなきやらん、たゝい」

（3才）まわれをうしなふへきかと、よくく見給へは、人のかたちなりければ、人をなつかしくおほして、さめくとなき給へは、あま人、見奉り、舟をこきよせて申やう、いかなる人にておはしませは、かゝる岩の上にはたゝひとりみ給ふそと申ければ、ひめ君、これはみやこの物なるか、舟よりすてられて有との給へは、あま人、まことにすてられてましまさは、いとをしく候なり、われらかすむ所へいらせ」（3ウ）給ふへきかと申ければ、うれしくこそとの給へは、あま人、かきいたき舟にのせ奉り、みきはへこきよせ、舟よりあからせ申、いわやの内へ入まいらせけり」（4才）絵1」（4ウ）さるほとに、そつ殿はたさいふへつかせ給ひて後、北の御かた、風の心ちにならせ給ふか、物くるはしく成て、きやうしやたちをしやうし、いのらせ給ふ、三日と申には、きたの御かた、きちやうの内よりとひいて、きやうしやのすすをおつとりふりならし、みやうわうの御まへにかゝる時、きやうしやに物かたりせんためにきたるらん、何ものそ、なのれくとなせめられて、其時、北のかた、はつかしけにてきぬひきかつ」（5才）きて、さめくとなき給ふ、やゝしはらく有て、かくこそかたりたまふ、我

はこれ、みやこのもの也、ちんせいのきやうしやに見ゆへからす、されとも、あまりのくるしさにたゝいま参たり、あふたの御かとの二のみやは、我なり、たいの君にははゝなり、さるにても、おんあひのみちこそかなしけれ、たいの君八にてしやうしむしやうのならひのかなしさは、かゝるいとをしきひめをすておきて、めいとおも」（5ウ）むく事のかなしさよとおもひ、しねんはしやはにとゝまりしゆへに、ほたいの道にもいらすして、けうやうすれともわうしやうせす、つくれるつみもなけれは、ちこくへもおちすして、いまた中うのたひにたゝよひぬ、朝夕まもるかひもなく、何のとかによりて、あかしのうらにてたいの君をはうみへしつめけるそや、あらくほいなや、うらめしやとの給ひて、あらはつかしとて、さめくとなき給ひて」（6才）後、しつまり給ふ、かやうになのり給へとも、たれ心をしつめて、さる事とはさとるへきならねは、北の御方はもとの心に成給ふ、扱も岩やのあま人は、ひめ君を朝夕かしつき奉りけり、おつとのあま、つりをしに出ぬる時は、女のおま御ときをし、又めのおま、みるめ、あをのりとりに出る時は、おつとのあま御ときをして、あけぬくれぬとせし程

に、はや四年にそ成にける、扱そつ殿は三とせも過け」  
 (6ウ) れは、みやこへのほり給ひけり、たかさこのお  
 きをすくるに、海の中に大なるはたそ見えける、四あ  
 の少将の入道、ちかきさとのきそう、かうそうをしやうし  
 て、しやうこんたうちやうをこしらへ、ほけきやう八ち  
 くめうもんをかゝれける、その見せはたとそ申ける、  
 たいの君をは此あたりへこそしつめ申つらんとおほしめ  
 し、うみの中へ御ほうらくしたまへり、なみにもぬるゝ  
 袖の上、よそのたもとまでもしほり」(7オ) かねたる  
 ふせいなり、そつ殿の御けうやうはことほりなり、少将  
 入道は、いまたあひみぬ北のかたゆへにさまをかへて、  
 かくつとめられけるこそ返々も有かたき事なれ、扱そつ  
 殿に御いとまこひてかへり給ふ、つくしへの御時は、の  
 ほりの時とこそちきり給ひしに、けふはなれなん後、又  
 いつともちきらねは、恋しき人のかたみのいとま、たか  
 ひにおもひ給ふもことほりなり、」(7ウ) おつるなみた  
 もかいのしつくもわきかねて、いまをかきりとおもへ  
 は、りんゑまうしうのふる里を、此度なかくへたゝりぬ  
 とおほしけるこそあはれなり、」(8オ) 絵2」(8ウ)  
 少将入道は、しよしやへかへり給ふ、そつ殿は、よとへ

そつき給ふ、みやこへのほりなは、君に御いとま申て、  
 しゆつけせんとおほしめしけるに、みかとしゆつけさせ  
 して、うさのみやのちよくし、ことゆへなくとけられ  
 たるよろこひに、大納言になされける、したい申給へと  
 も、りんけんなれはちからなし、よろこひの中にもなを  
 しの袖をそしほりたまふ、かゝりける折ふし、くはんは  
 く殿の御子に二ゑ」(9オ) の中将殿と申人、八月十五  
 夜のくまなき月に、さふらひあまためしくして、かも  
 のかはらに出てこまくらへをしてあそびたまふか、いかゝ  
 はし給ひけん、中将殿、むまよりおちてひたりのかひな  
 をそんし給ふ、そのれうちのために、いよの国へそくた  
 り給ふ、いく程もなくよくならせ給ひて、みやこへのほ  
 り給ふか、ひんこの国うしまとのみなとより、はりまの  
 国むろのとまりにつき給ふ、月のて」(9ウ) しほの夕  
 なきに、あちのむらとりわたるなり、くれゆくまゝに風  
 あらくなりて、しとろもとろになみたちて、五そうのと  
 もふねは、こなたへかたな<sup>(ママ)</sup>へわかれけり、心ほそさはか  
 きりなし、ろかいもかちもかなはすして、風にまかせて  
 ゆられゆくか、とある嶋へふきつくる、其時、舟のつな  
 をとり、なきさへおりさせ給ふ、中将殿、うらのものに



とはせ給ふ、扱も此浦を何といふそととい給ふ、うら人申けるは、こ<sup>二</sup>(10才)<sup>一</sup> れはあかしのうらにて候と申、扱はきこゆるめいしよなり、いさい<sup>(ママ)</sup>かいたうのおもひにて、いさやあそはんとて、御めの子の六ゐのしん、さこんのしやうけんきよきた、うきやうの大ふつねはる、さきやうの大ふこれはる、御いとこのからはしの少将殿、中山の中納言殿、此人たちを引くして、みきわのかたをめくりあそひたまふ、なにおふいそのそなれ松、心ありけるけしきかな、さる程に、あまの岩やに<sup>二</sup>(10ウ)<sup>一</sup> ちかつき給ふ、いさやゐ中のけらうのすまゐを見ん、人おほくてはよしなしとて、二三人あかり給ふ、さこんのしやうけん、六ゐのしんをひきくして、中將殿、あまの岩屋を御らんし給ふ、岩やの内をのそきたまふに、くちにはもくつをしき、見るもいふせき有さま也、袖ももすそもなかりけるやふれころもをこしの程にぬきかけて、おとこのあまはせなをあふり、女のあまはあとにゐてつり<sup>二</sup>(11才)<sup>一</sup> のいとをそよたりける、中將殿は御らんして、ゐ中のけらうのすみかは、いぬのふしとにことならず、いたしきもなきそとよ、すかこもをかきにかこい、とまやのとこのむつくけさよ、つちをふしとのほに

ふのこやのいふせさよ、いさや又、上のいわやにひそかにあかりたまふ、六ゐのしんはかへりぬ、中將殿とさこんしやうけんも岩やの内を御らんするに、おもひもよらず、さもゆふなるひめ君の、御年の<sup>二</sup>(11ウ)<sup>一</sup> 程十五六ほとゝ見えたるか、かみのかゝりよりはしめて、すかた有さま見めのいつくしさよ、あひきやうかゝやくほとどのけしきにて、ひとり火をあかしておはしける、こはいかにとおもひ、むねうちさはきて、しのひやかにさしよりて、くわしく見給へは、ひめ君は、人の見るともおもひもかけぬけしきにて、いとやさしき御声にて、

おもひきや身をあまになしはてゝかるもをひ<sup>二</sup>(12才)<sup>一</sup> とりあかすへしとは

とうちなかめ給ひて、なみたをはらくとなかせ給ふを御らんして、御心もそらにあこかれてのそき給ふに、岩やの内には、北としは岩やなり、南の方にさほをつりてうらやまふきの十三に、うへかさねのうちき、くれなるのはかまそへてかけられたり<sup>二</sup>(12ウ 絵3)<sup>一</sup> (13才) 中將殿、ふしきの事にそおほしけり、さこんのしやうけん申やう、よく御らんし候かと申せは、よく見侍るなり、かゝるふしき、よもあらしとうち見るよりも、何



となく此人のゆかしくおもふとの給へは、さこんのしやうけん申けるやうは、かゝる人里とをき所には、まゑんのものゝすむやらん、御かへりあれと申せは、さらはとてかへらせ給ふ、道すからも、さこんのしやうけんとてをてにとりて、」(13ウ) ふしきの事かなとてのたまひける、扱その夜のおくるおそしと、あま人をめしてかつきして見せよとの給へは、きのふのなみのなこりしつもらて、かなふましきと申せは、おほせをそむくはふしきの事とて、あまをみきはの松にいましめつけて、扱申しやうの給ふやう、たとひいかなる物なりとも、岩やのひめをいま一め見はやとの給ひて、又岩やへさし入て見給へは、きのふ御らんせしは」(14オ) ものゝかすならす、けさはなをまさりて、うつくしさとの中く、いふはかりもなかりけり、いかさまにもよしある人と見えて、岩やの内にうたをかきて有、そのうたの中に、

はかなしや 身をあま人と なしはてゝ よせくる  
なみに そてぬれて ほしこそわふれ わかなみた  
あはれととへる 人もたゝ なきさのとまや 風  
あれて ゆめもむすはぬ あかしかた かよふちと  
りの」(14ウ) ともよふも わか身のうへに しら

なみの よせきてかへる あまをふね こかれて物  
や おもふらん すみあらしたる あしかきの ま  
ちかからねば ふみたにも ふきつたへさる うら  
風の そなたのそらも なつかしや 身はむれ木  
となりはてゝ 人しれぬ身そ かなしけれどそ  
月はさしなみはよせきてたゝく戸をあるしかほにも  
あくるしのゝめ」(15オ)

たらちをにいかてしらせんうらにきてちいろのそこ  
をのかれたる身を

かゝる身をうらのあまなかりせはなみのそこにて  
くちやはてなん

月かけはあまの岩屋にやとれともむかしにかはるな  
かめなりけり

扱ひめ君はあさゐのとこに、なにこゝろなくやとらせ給  
ふを、中将殿さしよりて、おきさせ給へと有しかは、ひ  
め君うちおとろ」(15ウ) き、御めをひらき見給へは、  
からおり物のかりきぬに、うすけしやうにふとまゆつく  
りて、あてやかなる人なれば、有しみやこの事、ふとし  
もおほしめしいてさせ給ふ、これはたゝゆめかやとおも  
ひ、又きぬひきかつきふし給ふを、さほにかけたりし御

こそとりてうちきせ参らせ、さこんのしやうけん、ひきおこしおい奉り、こかねつくりの御はかせをは、中将殿みつからもたせ給ひてそかへり給ふ、風も」(16才)しつまりければ、御舟とも、ともつなをそとくにけり、扱あま人はゆるされけり、あまは、わか身のいましめられたる事をはなけかすして、岩やへおそく参事をなきて、岩やの内へはしり入、扱もふしきの事有て、いまゝて参候はす、さこそたよりなくおほし候はんと申て見奉れば、ひめ君見え給はす、いつのならひにかた時も出させ給ふへきか、あなかなしやとてはしりまはり、もたへこかれけり、おも」(16ウ)ひのあまりに、みきはへはしりゆきて、うみのかたへむかひていふやう、たとひりうくうしやうへ御かへり有とも、うみのおもてにうき出て、いま一度おかまれさせ給へ、天人にておはしまさは、雲のうへよりやうかう有て、今一度見え給へ、此三四年か間、なしみ参らせつる御なこりかなしくこそと、もたへこかれけれども、かひもなし、さるほくに、ひめ君のおはしますやかたの内には、れうらきんしうの御ふすまひきく」(17才)せ参らせ給ひて、とかくなくさめ給へとも、たゝなくよりほかの事はなし、中将

殿おもひのあまりにや、御かほたに見せさせ給はす、かほとに人にうとまれ参らせては、いのちいきても何かせん、うみへ入、そのみくつとも成なんとの給へは、ひめ君、なみたをなかし、かくめしくしたまはゝ、などやおやをもくし給はぬそや、いかはかりあとにてなけき候はんとの給へは、中将殿、何とてかくさせ給ふらん、あまの」(17ウ)子にてはおはしまさぬものをとの給へは、ひめ君、なみたをなかし、あまの子にあらすは、何しにかゝる所には住侍るへきなどの給へは、中将殿、何をかさのみおほせるそや、御すかた世にかくれましまさぬものをとおほせける、」(18才)絵4」(18ウ)とかくかたらひゆくほとに、よとにつき給ふ、御むかひのくるま参けり、御ともにはさきやうの大ふ、六あの新、さこんのしやうけん、ひたのせんしそ参ける、扱ひめ君をは御くるまにのせ奉り、さつしき、うしikai御車をとせ、大みやをのほりに、てんかの御しよへやりぬへけれども、それにはう大しん殿のひめ君、此三年いせんよりむかへ参らせておはしませはとはゝかりて、ひたのせんしikaiゑに入せ給けり、」(19才)ゑもんのかみといふさふらひの家にうつりて、わか家をはゆつり参らせ

けり、つきの日、中将殿、てむかの御しよへ参給ひけり、御は、きたのまん所御けんさんあり、中将殿は、御心にうれしき事のおはしければ、わか御方へ御かへりたくそおほしめしける、まん所の給ふやう、れうちめてたく候て、やかてもとのことくにとりなをしたまふ、うれしさよとおほせける、おのくかみしもの人々よろこひあひけり、扱いとま申(19ウ)て出給へは、北のかたには中将殿いらせ給ふとて、みず、こうしあけさせ、はきのこひ、北の御方もひきつくるひ給ふ、女はうちちもよいして、いまやくと待給へは、中将殿、くるまをよせて、北のたいへは御めをたにも見やらせ給はすして、ひたのせんしか家へそいそかせ給ひけり、扱又つきの日、大りへ参給ひてかへらせ給ひて後は、花見のみゆきにも出たまはず、たこもりゐさせ給ひて、天にすまはひよくの(20オ)とり、地にすまはれんしのえたとならんと、しやうくせはなれしとちきり給ひて、たかひの御心さしふかりければ、かた時ものはなれたまはず、なみくのかんたちめなんとの事ならば、あま人のむすめにくしたりとて、人くのしるへけれとも、一の人の御事なれば、おそれてさたする人もなかり

けり、扱北の御かたへは、此程のみ中くたりに、しほ風にふかれ候へは、色もくろく見るしく候程に参候はす、い(20ウ)かはかり御つれく御入候はん、ふるさとのかたへもおほしめしたせ給ひ候はんやと、文を参らせ給へは、扱はかわるならひの有なれば、ちからおよはすとて、やかて出させ給ふを、てんかとめ給ひて、中将殿をはふけうとおほせけるを、北のまん所、ふけうの事は色々申なため給ひて、たた御めをかけすとも、せいしまいらせ給へしと有しかは、ふけうはとまり給ひけり、扱きたのまん所、四人のきんたち(21オ)むかひ、此事をなかせ給ふ、四人のきんたちと申は、一人はとき的女御れいけんてん、二にはちうくのみやす所、三にはなかをかのはんはくとの北のまん所、四には内大臣殿の北の御かた、此人くむかひ、はうへは中将殿の御事をなきて物かたりし給へは、をくおほせけるやうは、中将殿はきはめて物はちする人也、おもふ中をさけつれば、そのおもひにあくかれてさんりんに入ぬれば、おやもともに(21ウ)身をいたつらになす事あり、たおもふよしにて、われらか中へる中のひめ君をよひよせて、かたくなはしき事を見い

たしてわらはんに、なとかははちてすてさるへきとの給へは、けにもしかるへしとて、めつらしからし<sup>(マヤ)</sup>つくり物をつくらせてよはんとて、ほうらいの山をつくらすへしとて、ものゝ上手ともを百人あつめてつくらせらるゝ、北の方の女はうたちに、大かくのすけのつほねと申女」(22才) はうは、人にすくれて物わらひのわんさん人なり、これをつかひにたつへしとて、御つかひにつかはし給ひけり、中将殿へ申させ給ふやう、四人のきんたちの御つかひに参りて候、さこそ御つれゝにわたらせ給ふらんとをしはかられ候、こなたさまへもおほしめしたち候て、御あそひ候へと申せとの御つかひにて候と申されければ、中将殿きこしめし、それゝ御返事申させ給へとありしかは、ひ」(22ウ) め君、こはつころひして、いきの<sup>(マヤ)</sup>してにの給ふやう、もんこくのものはどうさいもわきまへす、みやこまてはのほりて候へとも、八えたつ雲のほかは見す、ゐ中のものゝふるまひはあさましく侍るなり、かくて一日も候へは、中将殿の御ため、はちかましくおほえ侍るなり、かなふましきよし申させ給へと有しかは、」(23才) 絵5」(23ウ) 大かくのすけ、かへり参て此よしを申せは、ことはのつゝきはおもしろ

し、されとも声はなまりておかしかるらん、はやこやし、見てわらはんとて、かさねて御つかひあり、其時、北のまん所、たゝおもふよしにて、しろしやうそくをやらんとて、からあやのしろき御はかまを御ちの人にもたせて、又大かくのすけ参て申やう、きんたちのおほせ事に、御つれゝをしはかりまいらせ申に、などや中将殿せいし参らせ給ひ」(24才) 候はぬや、何とて御したい有へき、又、北のまん所のおほせには、何かくるしかるへき、これにもわかき女はうあまたさふらへは、御入候てあそはせ給へとおほせにて候と申されければ、まことにかやうにおほせ侍れば、おそれ入たる御事にて候、はやゝ御返事申させ給へとありしかは、ひめ君、御返事には、けんこうの波のをと、きんかくの御わさ、かりそめにもみゝにふるゝ事なし、はゝかり入候へとも、千ひきのいしをうこかし」(24ウ) てと申させ給へと有しかは、大かくのすけ、かへり参て此よしを申されければ、四人のきんたちは千ひきの石のうこかしてとは、こしといふ事やらん、こふといふ事やらんとの給へは、きたのまん所、千ひきのいしをうこかしてとは、千人してひくともうこくましきいしなれとも、おほせのおもさに

ゆるきいづるといふ事なり、いさやまうけせんとて、けふをはれといてたちたまふ、れいけんでんは、おみなへ」(25才)しの十五に、もよきのにをひうちき、うすくれなゐのひとへに、くれなゐの三えの御はかまをめしたり、ちうくうのみやす所は、もみちかさねの十五に、ゑひそめのうちき、うすくれなゐのひとへに、これも三えの御はかまめされたり、内大臣の北の御かたは、きくにほひの十五に、うすくれなゐのうちき、むらさきのひとへに、くれなゐ三えのはかまめしたり、一人のひめ君に三人つゝの女はうたち、ゑかき、花」(25ウ)むすひ、うたの道にもこゝろへたるをあひそへたまふ、四人のひめ君の御すかたを見給ふに、たなはたひこほしのあまの川にたち出て、かさゝきのはしをわたり、しやうのはやしにあそひゐたるけしきも、わか子のすかたにはよもまさらし、いはんや、ゐ中ものゝあまの子か、はやこよかし、見てわらはんとの給ふうちに、御くるまちかつきぬ、よく見てわらはんかために、御くるまをはちうもんへそよせ給ふ、扱みす」(26才)のまへを、せうてんはるかにねらすへとさためたまふ、おひ女はうとも、あまのむすめを見んとて、めもはなさすまほりける、中

将の御ため、はちかましくそおほえける、中将殿は、いかゝおほつかなさに、いたしきのしたにかくれゐてきておはしけり」(26ウ) 中冊終わり

さるほとに、御ともにはさこんのしやうけん、ひたのせんしなり、御くるまよせて、はるかにとをくそかしこまる、くるまよせのつまとのまへには、たかとうたいふたつかきたてゝ、女はう三人あたりける、三人なからしそくをふとくして、手ことにもちたれば、日中よりもあきらかなり、三人の女はうさしよりて、したすたれかきのけて、はや／＼おりさせ給へと申せは、御返事もし給はす、をの／＼さゝやきけ」(1才)るは、これを見て、よもおりさせ給はし、おりかねさせ給ふもことほりなりとそさゝやきける、やう／＼ほどありて、ひめ君、おりさせ給ふ、御かいしやくもなかりければ、身つからきぬのつまをひきあはせ、御くしかきなて御きぬの上にゆりなかし、御はかまのすそをひきなをし、もやのみすの前をせうてんはるかにあゆみ給ふ、御すかたは、さみたれにはみかさまざるむつたのものとあやめ、まこものうへこすよりも、」(1ウ) 猶たをやかにそいらせ給ふ、ひすいのかんさしは御きぬのすそにあまりければ、いたの上

にひかれて、風にしたかふあをやきの、うちなひくよりも猶もたをやかなり、あはれ、ゑにかきて此御すかたをあまねく人に見せはやな、いかなるゑしかうつすとも、筆もおよふしとおほえず、扱御しとねの上にゐさせ給ひて、うちそはみたる御すかた、たとへんかたそなかりけり、ひめ君見まはし給へは、にしきの「(2才)しとねあやのきちやう、さんこのゆか、たまのすたれ、一の人の御所なれは、さすがに心にくもおもひしに、わかちゝのにしのたいをしつらひて、われをすませ給ひしよりも、はるかにおとりてそ見えにける、これを見給ふにつけても、むかし恋しき御すかた、つゝむにたへさる御なみた、みたれかみをつたひきて、おさふる袖にあまるを、さらぬていにもてなして、見まはしたまふ御めのうち、あくまで」(2ウ) けたかくおはしける、北のまん所、これを御らんして、しろきしやうそくは中くけたかく侍れは、わか四人のきんたちは、しまのあま人の子かとよ、中将の人に見あはすれは、けすしさきりもなし、さるほとに、ほうらいのつくり物をとりいたして見給へは、一め二め御らんして、又とも見給はず、日比見るわれたにも、見れともくあくる事なし、めもかけ

させたまはねは、物いひ、こゑはおかしかるらん、物いわせてき」(3才) かとて、れいけんてんの給ひければ、かやうの物はめつらしからぬ物なれとも、見せ参らせんためにおほせければ、ひめ君よく御らんして、はつかしなから、此ほうらいのいはれをあらくかたり候へし、あつきうてんと申は、雲の上のみやこなり、ほうらい山と申はかいちうのみやこなり、せんにんきたりてくすりをとらんとせし程に、六つにくつれて、その一つ、なんせんふしうにあり、かのほうらいに一つの家」(3ウ) 有、ちやうせいてんとなつく、前にはふらうもん有也、ふらうもんのさかひに一のいちあり、ちやうあなかせいのおちといふ、此市に一のくるま有、ふらうふしのくすりをしるくるまなり、此くるまの内につほ有、こくうかつほと申は此心なり、ほうらいのその内には、こくうかつほはなきやらんとおほせ有ければ、しる人もなければ、御返事にもおよはずして、あきれてそまほりゐたり、扱其後、かのつほのふしん」(4才) をたつね給ふへき人もなかりけるに、たうのみねりやうそんなこそ、なをゑたるかくしやうなりときこしめし、とはれけるに、こくうかつほね(ツツ)のいはれ、ひめ君の

御ことはにすこしもちはさりけるにや、これをふしきと申される、此ひめ君の物の給ふこはいろは、きんのしらへ、かれうひんのこゑ、れうのきんするよりも、猶おもしろきこはいろなり、其後、れいけんてん、御ことを参らせてあそはせと有し」(4ウ)かは、ひめ君、いそにしくるゝ松風の、つまをときためぬひゝきをは、みゝにふれしかとも、かやうの事はおもひもよらぬと有しかは、中将いたしきの下にて、かほとのこととおもひなは、なとかひわ、ことひかすとも、九ほんれんたいのうへまでも、はなるましきものとそおほしめしけり、れいけんてん、はやゝあそはせと、御てをりやうかくのもとにそへられければ、そむきかたきおほせかなとて、御ひさの上にことを」(5オ)かきのせて、ことちをたてなをし、二七日のをかきあわせ給へは、心ことはもおよはれず、おもしろかりけり」(5ウ) 絵1」(6オ)さて又、御ひわ参らせて、あそはせと有しかは、ひめ君、おもひより候はすとて、しきりにしたい有しかとも、御ことのやうにあそはせとて、御ひわをさしよせ給へは、そむきかたきおほせかなとて、御ひわをとりなをして、はんしきにねをとりなをし、かきならし給ひた

り、はちをとはりやうせん、たくほく、こうの三きよくを二へんまでそひき給ふ、雲の上までもすみのほり、天人もあまくたり、」(6ウ) ふつしんもめてたまふらん、これをきく人々は、そゝろに袖をしほりけり、わらはんとおもひし人々も、何事もうちわすれ、かにたへてそゐたりける、扱あかつきかたにもなりしかは、御むかひのくるままいりければ、をのゝなこりをおしみて、夜もほのゝと明しかは、御くるまにそめされける、四人のきんたちは、くるまよせまで出させ給ひて、これまでこそ参て候へとのたまへは、おほせこそ」(7オ) おそれ入てさふらふ、はゝかりなから参て、おのゝ御けんさんこそ、かへすゝうれしく候へとその給ひける、扱御くるまやりいたしたれば、のこるおもかけいつかはわするへきと、めんゝにの給ひける、其後、北のまん所、四人のきんたちにの給ひけるは、ふしきの事かな、過にし比、ほり川の大納言のみやはらのひめこそ、てかき、うたよみ、ひわことのしやうすなり、十の比より、しよけいのみなもとをき」(7ウ) はめ給ふ、さらにほんふとおほえすとて、をのゝ心をかけられしか、中将もこはんとせしかとも、四ゐの少将にこされてちから



およはす、扱大納言たさいふへくたりし時、あかしのうらにて、日本にすぎたるひめなりとて、りうくうしやうへとられて、扱こそ四ゐの少将は、はりまのしよしやにおこなひすまして有けるそや、そのひめ君も、いまのあま人のむすめにはよもまさし、かた時見」(8才)るわれらさへ、見れともくあかす、中将のわりなくおもふもことはりなり、右大臣のひめ君も、中将の見ねはよめならず、たとへあま人のむすめにても、あれわか子を見るこそよめなれとて、かゝる人又世の中によもあらしとて、やかて御よめにもちゐたまはんと給ひて、さへもんのすけ、ひやうゑのすけ、うへもんのつほねと申上らう女はう三人、女はうたち六人、うへわらは三人、」(8ウ)はしたものの五人、くるま三りやうにのせてやりつゝけられける、御ふみには、これ見くるしく候へとも、としころめしつかひたるものともにて候、はちさせ給はてめしつかはせ給へとて、おくらせ給ふこそ、ありかたけれ」(9才)絵2」(9ウ)其時、申しやうおほせけるは、いまは何をかつゝませ給ふへき、あ中人にてはわたらせ給はす、いはんやあまの子にてもおはせず、ありのまゝにかたり給へとの給へは、ひめ君、さめくとう

ちなき給ひて、あまのそゝろにこひしさにこそ、たもとのひるまもなければ、おやにてましまさねは、御心にかゝらぬもことはりなり、わらはかためにはおやなれは、わするゝひまも候はすと、猶もかやうにその給ひける、さる程」(10才)に、岩やのあまは、ひめ君のわかれをかなしみて、女はかみをそりて、ひめ君御ほたいをそとふらひける、ふうふともにしやうあるものをころさすして、みるめ、あをのり、わかめ、おこのり、ひしきもととりて、世をわたりけるか、ひめ君の御ためにとて、山に入ては花をたをり、たにゝおりては水をむすひ、あやしきあまなれとも、なさけ有ものにそ有ける、有時、中将殿は、かも、やはたへしんめをそひかせ給ふを、」(10ウ)何事の御いのりそとくに、姫君たゝならすわたらせ給ふか、はや五月にならせ給ふ、その御いのりとそきこえける、其後、てんかよりおほせ有けるは、あま人のむすめにくしたれば、中将はわか子にてはなし、むまれたらん子はわか子にすへし、むまれたらん時、はゝのひさにおかすして、いたきとりてこれへわたすへしと有ければ、ほとなく月日かさなりて、御さんたいらかなり、あたりもかゝやくほと」(11才)のわか君



にてそおはしける、大納言のつほね、きぬの袖につゝみてうけ奉り、てんかの御所へそ参給ふ」(11ウ) 絵3」(12才) てんか、大に御よろこひ有て、二条にしのとうゐんにわたらせ給ふ、中なこん殿、御めのとにめされけり、御車には、大なこんのつほね、いたき参らせてのり給ふ、御たちはきには、きよけなるさふらひ百よにんそしゆこし奉る、けたかくそおほゆる、御うふゆは、てんかの御所にてひかせ給ふ、御ちの人には、ちくせんのせんしか女なり、かくて月日をおくらせ給ふほとに、又ひめ君をそまふけ給ふ、月」(12ウ) 日にせきもりすへされは、程なくわか君七さい、ひめ君五さいの八月十日の御はかまきのおやには、ちさうゐんのきやうふきやう参給ふ、一の人の御子のはかまきなれば、大しん、くきやう、てんしやう人もれす参給ふほとに、ほり川の大納言殿も参給ひけり、その時、ひめ君、二人のきんたちを御ひさの上におき参らせての給ひけるは、くきやうの御中に八はんめにわたらせ給ふを三たひ」(13才) つゝおかみ奉り給へと、なみたをなかつてをしへ奉れば、きやうふきやうのみや、御はかまきせ参らせて、くきやうの中へいらせ給ひて、八はんめにをはしますそつの大納言殿

を三たひおかみ参らせて、御しとねにかへり給へは、人／＼ふしきのおもひをなす所に、てんか、そつ殿をは何のゆへにおかみ給ふそと、きんたちにとい参らせ給へは、きんたちの給ふやうは、はゝ御せんのおかみ奉れとお」(13ウ) ほせ候との給へは、てんか、さこんのしやうけんをめされて、此いわれをれん中へたつね申させ給へは、れんちうよりおほせいたさるゝやうを、さこんのしやうけん、かしこまつて袖をかきあはせてうけたまはりぬ」(14才) 絵4」(14ウ) ひめ君、御なみたをおさへておほせらるゝやうは、われはにんけんにむまれ、五人のおやをもちたり、そのゆへは、まことのちゝはそつの大納言殿なり、はゝはあふたのみかとの二のみや、やしなひをやは岩やのあまふうふなり、又さとうさへもんなり、われ十三のとし、ちちそつ殿つくしへ御くたりの時、あかしのうらにて、まゝはゝ御せんのおほせによりて、うみへしつめられけるを、さとうさへ」(15才) もん、つかひにて有しか、なさけ有て、たちまちうみへしつめすして、おきの岩の上にすておきたりしに、岩やのあま、あさりしに出けるか見つて、くしてわかすみかにかへり、四年かあひた、いつきかしつておきたり

けるか、ふしきにふるさとのみやこへのほりぬ、やか  
てもちゝそつ殿にかくと申たく侍りしかとも、さため  
てまゝは、御せんをうらみさせ給ひなん、さあらん時」  
（15ウ）は、われふけうのうちに入へしとおもひて、い  
まゝてはかくとも申さぬなり、わか此わか君、ひめ君、  
いつも見れともあく事なし、ましてや、わかちゝのたゝ  
ひとりもち給ひて、ゆくへなくなりてのちは、さこそお  
ほしなけくらん、おひたるおやにさのみ物をおもはせ申  
さんも、あまりにつみふかしとおもふ也、めてたくけふ  
しも、ちゝのけんさんに参らせん事こそ、返々もうれし  
く候へと御」（16オ）なみたとともにおほせいたされけ  
れは、此よしきこしめし、てんかをしめ奉りて、子を  
もち給ふも、もち給はぬも、一とうにこゑをあけてなき  
たまふ、右大臣殿も、扱も此人ゆへにわか子は世をいと  
ひ、身をすてゝほうしになりし、かなしさよと、ふしま  
るひてそなき給ふ、そつ殿は、これは夢かやうつゝかや  
とて、なをしの袖をしほり給ひける、其程に日も暮ぬれ  
は、をのゝ（16ウ）かへり給ひぬ、もやのみすのま  
へを大納言殿とをらせ給ふを、しやうし入参らせて、た  
いの君にあひ参らせ給ふ、扱過にしかたの御事とも、つ

やつや御物かたりし給ひて、うれしきにも、たかひの御  
なみたせきあへたまはず」（17オ）絵5」（17ウ）いとま  
をこふて、大納言殿もかへらせ給ひぬ、扱北のかたおほ  
せけるは、人ゝはとくかへり給ふに、なとやおそくか  
へらせ給ふそと有しかは、されは人のなけきはすゑもと  
をらす、身にあまりて、いまはよろこひとなりけるそ  
や、北のかた、身にあまりての御よろこひはいかなる事  
やらんととひ給ふ時、扱何のとかによりて、たいの君を  
は、あかしのうらにてうみへしつめ給ふそや、とかなき  
事は」（18オ）よも候はし、とくゝうけたまはり候へ  
しとせめ給へとも、とかくの事もきこえたまはて、あき  
れはてたるけしきなり、大納言の給ふやう、われもわろ  
きものゝおやなれば、さこそは心くるしとおほしつら  
ん、けに神ならぬ身はくちおしきことそかし、それ女は  
すかたはほさつゝて、心はとくしやのことしと、ほと  
けのとき給ひしもことはりなかし、かゝるむくつけき人  
をは、かた時見る事」（18ウ）もかなふまし、いそき御  
くるま参らせよとて、ふるさとへそおくり給ふ、北のか  
た、ふるさとへはゆかすして、すくにいなりそこもり  
給ふ、きせい申さるるこそはおそろしけれ、なむいなり

五しやの大明神、ねかわくは、たいの君にさんひやうのやまふをさつてたひ給へと、七日こもりてのろひけれども、神はひかことをうけたまはねは、のろはるゝたいの君はつゝ、かもなくして、此まゝはゝ、日比、人」(19オ)に物をおもはせし、そのむくひつもりてや、心物くるはしく成て、御しやうそくもひきやふりすてゝ、はたかにてくるひまはれは、ふるさとの人ゝも、かゝるむくつけきものはかなふましとて、よする人もなかりければ、年四十二と申はるの比、つゐにくるひしにゝそ成給ふ、扱てんかは岩やのあま人をめしのほせ、てんかの御所へはむくはんにては参らぬ事なれば、さふらひのしやうそくをき」(19ウ)せて、大ゆかまでめされて、ひめ君御けんさんましゝて、かすゝのたから物をたまはり、あかしのうら、あはちしまをゑいたいあんとの御状を、てんか殿よりたまはり、あま人はよろこひてかへりけり」(20オ) 絵6」(20ウ) 人になさけをかけぬれは、人にもなさけをかけらるゝそかし、扱そつ殿は、さとうさへもんをめして、たいの君をたすけおきぬるおんしやうに、いよの国をたまはりぬ、さたいゑかしこまつて申やう、かたしけなきおほせにて候へとも、すてにわ

れよはひかたふき候へは、かゝるうき世をふりすてゝ、こせをねかい申候はんと、御いとまを申こひ、かうや山に参おこなひすましけるを、ほめぬ人こそなかりけり、ひ」(21オ) め君の御はゝみやの御時の人人、此よしをきゝ、かなたこなたより、われもゝと参あひて、みやつかへ奉る、さる程に、中将殿のひめ君、十三にて女御に参給ふ、若君は中将殿と申て、大しやうかけ給へり、さきの中将殿、後にはくはんはくにそ成給へは、たいの君もきたのまん所とて、めてたくさかへ給ふ事、かきりもなし、人のためによき人は、すゑひさしくはんしやうする事」(21ウ) うたかひなし、人のためにわろきものは、のちの世までもあさましく、ちこくにおつる事うたかひなし、しひの心をもつ人は、神ほとけもしゆこし給ひ、けんせあんおん、こしやうせんしよとそ」(22オ) 下冊終わり



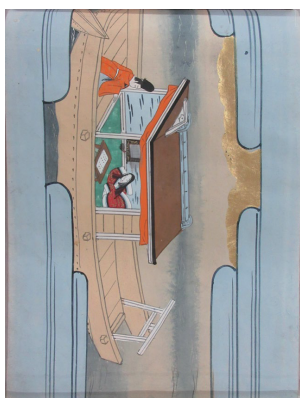
上:1



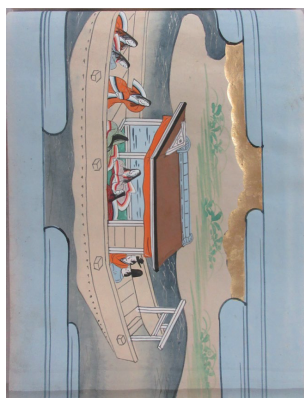
上:4



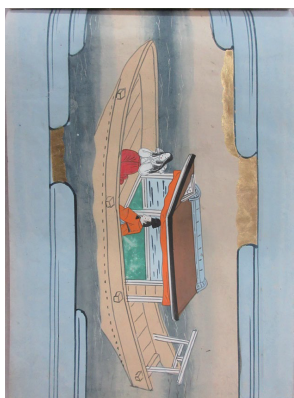
上:2



上:5



上:3



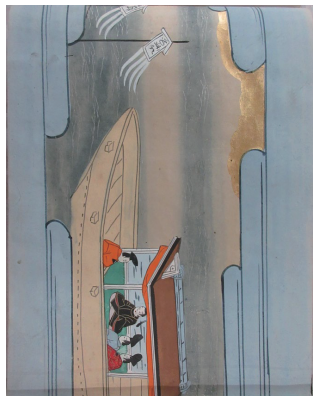
上:6



上 7



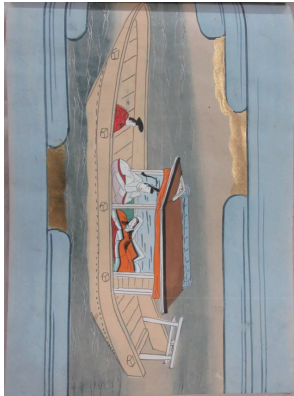
中 1



中 2



中 3



中 4



中 5





下 1



下 2



下 3



下 4



下 5



下 6

## 【付記・反省の弁】

本誌前号掲載の拙稿「大坂町奉行・曲淵甲斐守のお裁き」は、『明和雜記』に収録された曲淵甲斐守の関わった裁判話を取り上げました。脱稿後、曲淵甲斐守の裁判譚として『石曲秘事談』『石曲秘談抄』『石曲比事』などの裁判説話集のあることを確認しました（書名の石は石河土佐守政武、曲は曲淵）。その中には、捨て子裁判（石曲秘事談第十二）、平野郷の後家火付け裁判（同前第十四）など、曲淵甲斐守の大坂町奉行在籍時の事例があります。それらを扱うことができませんでした。さらに、『明和雜記』についても、祖本にあたる『つれ／＼飛日記』や、相互に関係をもつ『明和雜録』『談笈』等があることを見落としていました。前稿は曲淵甲斐守の裁判話を当時の法令に照らして個別に読み、紹介したものであり、諸資料によってその内容が大きく変わるものではありませんが、結果的にみて、もろもろ調査・準備不足で書いてしまったことは否めず、汗顔のいたり、反省しきりです。

## 【参考資料】

- ・日野龍夫「カリフォルニア大学バークレー分校蔵『明和雜録』紹介」『混沌』六号、昭和55年3月）
- ・多治比郁夫「大阪の随筆（一）（六）」（続日本随筆大成第七巻）第十二巻、吉川弘文館、昭和55年6月・56年4月）
- ・垣口弥生子、坂本恭子、佐藤敏江、平野翠、多治比郁夫「翻刻『石曲秘事談』（後半十巻）」『大阪府立図書館紀要』三十二、平成8年3月）
- ・「石曲秘談抄」（『京都大学蔵大惣本稀書集成』第七巻雑誌I所収、解題・山本秀樹、臨川書店、平成8年7月）